

レポートの書き方



大阪電気通信大学図書館 発行 2021.4.1

レポートを書くときどうやって書けばいいかわからない。
表記・体裁のルール、文章の組み立て方、感想文とレポートの違いが
わからないと戸惑うことはありませんか？
そんなみなさんに「レポートの書き方」をご紹介します。

感想文とレポートの違い

レポートは、課題に対して調査・研究した内容とそれに基づく自分の意見をまとめた報告書です。
自分の思ったこと、感じたことを書く感想文とは異なります。

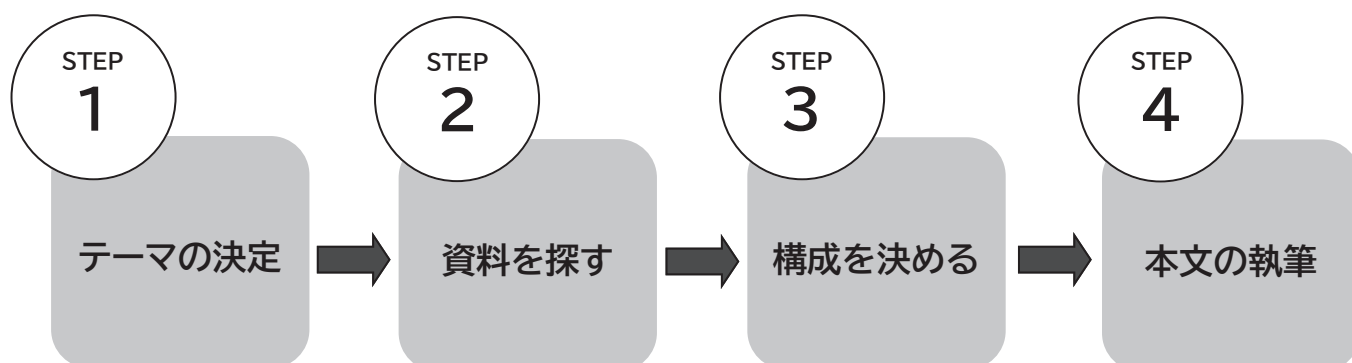
	感想文	レポート
内容	感じたままを表現する	「主張」とそれを支える「根拠」を述べる
構成	書きたい順序で	決まった形式に沿って
視点	主観的・個人的に	客観的・一般的に

レポートを書くときの心得

- 1.文章の構成に気をつける。
- 2.事実と意見をはっきり区別して書く。
- 3.意見の根拠(論拠)をはっきり示す。

レポート作成の手順

レポートはいきなり書き始めず、手順に沿って作成しましょう。



STEP

1

テーマの決定

レポートのテーマを自分が関心のある話題に絞り込みをすることが大切です。「何について知りたいのか」「何について書きたいのか」が具体的であればあるほど、スムーズに情報を探し出すことができます。

例)

「環境について調べる」

「居住環境について調べる」

「居住環境の暖冷房効果について調べる」

↑ 抽象的 …… 調べにくい

↓ 具体的 …… 調べやすい

STEP

2

資料を探す

◆図書を探す …… 「図書館利用ガイド① 図書の探し方」を参照しましょう

◆雑誌記事・論文を探す …… パスファインダ「雑誌記事・論文を探す」を参照しましょう

◆新聞記事を探す …… パスファインダ「新聞記事を探す」を参照しましょう

◆インターネットで情報を探す

▲ インターネットを使って情報を探す場合は注意しましょう ▲

インターネットについては、さまざまな情報倫理上の問題(HPの著作権、利用者のプライバシーの保護、リンクを張るときの注意など)があります。利用できる情報が確認をして、必ず出典先を記載しましょう。

◆情報源が信頼できるものであるか確認しましょう。

例)○ 公的機関、研究機関サイト、出典が示されているサイト など

× ウィキペディア、ブログ、掲示板、SNS など

◆引用する場合は、URL・サイト名・著者名・書名や論文名・最終アクセス日を表記しましょう。

また、ページが削除されてしまうと出典の再確認ができないので、念のために日付のついたプリントアウトをとっておき、場合によっては資料として残しておきましょう。

※「ウィキペディア」は多くの人が利用して便利ではあるものの、

誤った情報も掲載されている場合があります。必ず図書資料などで裏付けをとりましょう。

※ネット上には、他のHPからのコピー・アンド・ペーストや、書籍からスキャナーで読み込む等の無断転載された文章や画像があり、これらの多くは著作権法に違反しています。

運営者が公的な機関かどうか、あるいは個人でも住所(所在地)や電話番号、

問合せ先メールアドレスを表示してあるか確認しましょう。

そうでないサイトの情報は、引用や転載を控える方が無難です。

インターネット検索のポイント

インターネットを使って情報を検索するには一般的な検索エンジンだけではなく、Google Scholarといった研究専用の検索エンジンなども使ってみましょう。

Google Scholarは日本国内の文献検索にはやや弱いので、その場合はCiNii(日本国内の学術論文を網羅するサイト)を利用しましょう。詳しい使い方は、図書館利用ガイド③CiNii Articles & Dissertations や、図書館利用ガイド④CiNii Books を参照しましょう。

STEP
3

構成を決める

レポートは「序論(問い)」「本論(主張)」「結論(論証)」の3つの要素で構成されています。

表題	序論:何について書こうとしているのか明らかにする(問題提起)
	本論:問題提起したことに対し、最終的な主張をするための根拠を述べる
	結論:これまでの内容を整理し、最終的な主張を確認する

STEP
4

本文の執筆

レポートを書くにあたって、書式などの細かいルールを確認しましょう。

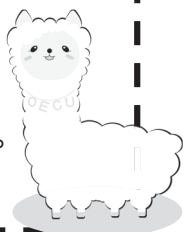
文体	「である」体で書く 「です・ます」体を混在させない
段落	段落の第1行の最初の文字は、1つ下げて書き始める また、改行をしない、改行のしすぎには注意する
行頭禁則	「、」「。」「,」「,」などの句読点や、「!」「?」などの感嘆符記号 「)」「)」「)」などの閉じる方の括弧類 「ゃ」「ゅ」「ょ」などの小さい文字
行末禁則	「(」「(」「(」などの開く方の括弧類
数字表記	横書きの場合、数字は半角の算用数字を使用する
アルファベット表記	横書きの場合、半角文字を使用する 英単語が1つの行に入らず2行にわたる場合、ハイフンでつなぐ ただし、どこで区切ることができるかは辞書で確認する 例)beautifulの場合…辞書には beau·ti·ful と書かれているので、 beau-tiful か beauti-ful の2通りの区切り方になる
「 」	会話・引用した文や語句、論文名などで使用する 括弧内に文を入れた場合、「。」はつけない ただし、引用した文が3行以上になる場合は「 」を使わない ※引用した文が3行以上の書き方は、引用文献についてを参照
『 』	書名、雑誌名などの作品名に使用する
ページ数の表記	「p.(pはpageの略)」小文字でピリオドをつけ、複数ページは「pp. 」 と重ねて使用する また、「p. 」は省略もできるが、総ページ数を記入する際は 省略しない 例)p.16, pp.25-30, 1-7, 25p. など

ページ番号、章番号、字数・行数指定の方法

論文の場合は、各ページに章番号を入れると見やすくなります。

Wordには便利な自動入力機能があります。

- ◆ページ番号：【挿入】の【ページ番号】で指定をすれば自動的に入力されます。
- ◆章番号：「第一章 論文書式」という表記は、【ヘッダー】の機能を使って書き込むことができます。
- ◆字数・行数：【書式設定】や【ページ設定】などで指定できます。



略誌名の調べ方

外国語雑誌は、雑誌名が省略されて表記されていることがあります。

例)Roth. M., Hempelmann. R. “Nanocrystalline LiF via microemulsion systems” *J. mater. chem.*
9(2), 1999, 82-92 →省略された雑誌名

検索のポイント

省略された雑誌名は調べることが可能ですが、存在する全ての雑誌を網羅している略称表はないことを前提として認識しておきましょう。

◆CiNii Books

雑誌に限定し、タイトル・ワードまたはキーワードで検索。略称の各単語後に*をつけ、前方一致検索にする必要がある場合がある。(例:J. mater. chem.→ J* mater* chem*)

◆Webcat Plus

一致検索で、キーワード検索する。
<http://webcatplus.nii.ac.jp/>

◆PubMed

Journals in NCBI Databasesで略称から検索ができます。
<https://www.ncbi.nlm.nih.gov/entrez/query.fcgi?db=journals>

これらを使って検索すると、例の『J. mater. chem.』が『Journal of materials chemistry』であることがわかります。

レポート仕上げのチェックポイント

1. 内容 <input type="checkbox"/> 感想文になっていないか <input type="checkbox"/> 事実と意見が明確に書かれているか <input type="checkbox"/> 主張は明確か	4. 本文 <input type="checkbox"/> 指定された書式を守っているか <input type="checkbox"/> 誤字・脱字はないか <input type="checkbox"/> 引用文の書き方は適切か <input type="checkbox"/> 指定された文字数を守っているか
2. 構成 <input type="checkbox"/> 序論・本論・結論の順序になっているか	5. 引用・参考文献 <input type="checkbox"/> 参考文献のリストをつけているか <input type="checkbox"/> 参考文献の書き方は適切か
3. 情報収集 <input type="checkbox"/> テーマについてよく調べたか	
6. 提出の前に <input type="checkbox"/> 氏名、学籍番号、学科、授業科目名など忘れていないか <input type="checkbox"/> 提出期限・提出方法を守っているか	

レポートの書き方 参考文献

学習技術研究会編著(2011)『知へのステップ：大学生からのスタディ・スキルズ』くろしお出版

河野哲也著(2002)『レポート・論文の書き方入門』慶應義塾大学出版会

桑田てるみ編(2015)『学生のレポート・論文作成トレーニング：スキルを学ぶ21のワーク』実教出版

戸田山和久著(2012)『新版 論文の教室』NHK出版

上記の参考文献はすべて本学に所蔵があります。

引用とは

自分の考えを補足し、説明・解説するために、他人の文章や事例を引くことです。引用を行うことで、自分の意見を効果的に補完し、主張することができます。その反面、引用のし過ぎは自分の意見が埋もれてしまうので気を付けましょう。また、引用する際はどこから引用したか明示しなければ、**盗用**(他人のものを無断で使用すること)、**剽窃**(他者の意見を盗んで自分のものとして発表すること)にあたります。必ず、引用のルールを守りましょう。

●引用をするときにやってはいけないこと

- ・インターネット上にある情報をコピー・アンド・ペーストする
- ・他人のレポート、論文の丸写しをする
- ・先行研究の結果を自分の研究成果とする
- ・引用であることを述べずに人の意見を掲載する
- ・孫引き…他人の論文の中に引用されていた別の他人の文章を、元の論文を確認しないでそのまま使う
- ・出典を書かない

※上記を守らないと不正な提出物として扱われるだけでなく、不法なものとして扱われるので注意しましょう。

●引用するときのルールを確認しましょう

1. 引用元 …… オリジナルの資料から原文どおり引用する
2. 要約 …… 原文を要約して引用した場合は自分が要約したことを明記する
3. 引用の目安 …… 引用文が400字以内または自分の書く全文の2割以内

●引用文献の書き方

- ・引用文献の書き方として、直接引用と間接引用の書き方があります

①直接引用 …… 紹介したい部分をすべて抜き出して使う。著者の主張をそのまま紹介したいときに使う。1～2行は本文中に「 」を使い、3行以上は前後の1行の空白行と前後を1～2字下げて表記し、「 」は使用しない。

例)建物の温熱環境を考える指標として、「環境条件としての温度、湿度、気流、放射、じんあいなどの空気質などの物理的要素がその指標となる」(鈴木他, 1999)としている。

②間接引用 …… 紹介したい部分を要約して使う。文のなかからキーワードや重要な文を読み取って要約する必要がある。

例)大内(2010)は日本の住まいの涼の取り方は伝統的な日本の建物だけでなく、打ち水や夕涼みといった工夫があったと述べている。

- ・日本語と外国語の表記の違いを確認しましょう

日本語	論文タイトル	「 」で表記する
	雑誌名	『 』で表記する
	著者が複数	全員を表記、または2、3人まで表記、1人だけ書いて最後に(他)をつける
外国語	論文タイトル	“ ”で表記する
	雑誌名	イタリック体かアンダーラインで表記する
	著者が複数	全員を表記、または2、3人まで表記、1人だけ書いて最後に(et al.)をつける
	その他	巻:volume, (略:v., vol.), 号:number (略:no.)と表記する より省略する場合は、巻は数字のみ、号は()で表記する 例)vol.45 no.5, 45(5)

- ・その他、利用した文献や資料に関するすべての情報の一覧を表にして、文末・章末につけくわえることで、引用文献の出典情報を簡略化することができます。これを文献表と呼びます。引用文献が多くなる場合は、文献表をつけましょう。

●引用文献の関連付け

本文と文献表の関連付けにはいくつか種類がありますが、ここでは一般的とされるバンクーバー方式と、ハーバード方式の説明をします。実際にレポートを書く際は、担当指導教員に相談してから書きましょう。

◆バンクーバー方式：科学技術論文に多い。

本文での引用箇所に引用順に参考文献の連番を振り、参考文献欄に連番順に参考文献を記述する方式。

例) 建物の温熱環境を考える指標として、「環境条件としての温度、湿度、気流、放射、じんあいなどの空気質などの物理的要素がその指標となる」(1)としている。(以下略)

技術発達前の日本が行っていた住まいの涼の取り方として以下の方法がある。

伝統的な日本の住まいでは、夏には深い庇やすだれにより直射日光が室内に入らないようにしたり、竹や葎でつくられた風通しのよい簾戸(夏用の障子)を障子やふすまと入れ替えたり、打ち水や夕涼みなど夏の暑さをやわらげる工夫がされてきた。(2)

技術発達後は冷暖房の普及が進み、快適な室内環境が提供されるようになり(以下略)

参考文献 (1)鈴木道哉(他)(1999)「住宅の温熱環境」空気調和・衛生工学会編『暖房と冷房』pp.14-17
(2)大内孝子(2010)『住まいと環境』彰国社 pp.8-16

◆ハーバード方式：人文・社会科学の広い分野に多い。

本文での引用箇所に著者名と発行年を記述し、参考文献欄は著者名・発行年順に参考文献を記述する方式。

例) 建物の温熱環境を考える指標として、「環境条件としての温度、湿度、気流、放射、じんあいなどの空気質などの物理的要素がその指標となる」(鈴木他, 1999, p.14)としている。(以下略)

技術発達前の日本が行っていた住まいの涼の取り方として以下の方法がある。

伝統的な日本の住まいでは、夏には深い庇やすだれにより直射日光が室内に入らないようにしたり、竹や葎でつくられた風通しのよい簾戸(夏用の障子)を障子やふすまと入れ替えたり、打ち水や夕涼みなど夏の暑さをやわらげる工夫がされてきた。(大内, 2010, p.12)

技術発達後は冷暖房の普及が進み、快適な室内環境が提供されるようになり(以下略)

参考文献 大内孝子(2010)『住まいと環境』彰国社 pp.8-16
鈴木道哉(他)(1999)「住宅の温熱環境」空気調和・衛生工学会編『暖房と冷房』pp.14-17

●文献表の書き方

◆著者が1人の図書

①著者名(翻訳者名) ②(出版年) ③『書名』 ④出版社名 ⑤引用ページ

例) 大内孝子(2010)『住まいと環境』彰国社 pp.8-16

◆著者が複数の図書

①著者名 ②(出版年) ③「論文名」 ④編者名 ⑤『書名』 ⑥引用ページ

例) 鈴木道哉(他)(1999)「住宅の温熱環境」空気調和・衛生工学会編『暖房と冷房』pp.14-17

◆雑誌論文

①著者名 ②発行年 ③「論文名」 ④発行機関名 ⑤『雑誌名』 ⑥巻・号 ⑦引用ページ

例) 前真之(他)2002「集合住宅における冷房の使用状況に関する研究」空気調和・衛生工学会『空気調和・衛生工学会論文集』27巻87号 pp.41-50